

# 地域資源としての在来馬の保全と活用

## Conservation and Application of Native Horses as Regional Resources

○服部俊宏\*、高橋弘\*、高井伸二\*、松浦晶央\*、菊池忍\*\*

HATTORI Toshihiro, TAKAHASHI Hiroshi, TAKAI Shinji, MATSUURA Akihiro, KIKUCHI Shinobu

### 1. はじめに

その地域にしか存在しない貴重な生物資源は、その希少性ゆえに、他の地区にはない地域資源として地域振興に貢献できる大きな可能性を秘めている。本研究では、日本最小の在来馬が存在する愛媛県今治市乃万地区の日本在来馬野間馬を事例に、在来馬の保全と活用のあり方を考察する。

### 2. 野間馬の特徴と現状

野間馬は、愛媛県今治市乃万地区（旧野間郷）の農家で飼養されてきた日本最小の在来馬であり、「日本在来馬野間馬」として今治市指定文化財（天然記念物）となっている。野間馬の特徴は、小型、気質が穏やか、持久力あり、蹉跌の必要なし等である。そのため、急傾斜地での駄載用として重宝され、小型の馬として改良・繁殖が進められた。しかし、明治にはいると、陸軍の馬匹改良の方針に合致しない野間馬の生産は禁止され、さらに戦後は輸送手段の変化に伴い、頭数が激減した。

野間馬の保存に最初に取り組んだのは愛媛県立とべ動物園（当時は道後動物園）であり、昭和 30 年より 2 頭が導入された。その後、昭和 53 年に残存していた動物園外で残存していた 4 頭が今治市に寄贈され、計 6 頭から保存のための取り組みが本格化した。

現在は、後述する保存の取組の結果、野間馬ハイランド・とべ動物園・恩賜上野動物園（東京都）の 3 カ所に計 84 頭生存している。

### 3. 野間馬保存の取組

#### (1) 今治市と野間馬保存会

今治市における野間馬の保存のための活動は、昭和 53 年に個人的に野間馬の保護を行っていた松山市の篤志家が、地元（乃万地区）での保存を条件に、4 頭の野間馬を今治市に寄贈したところから始まった。市では保存のための受け皿として地元地縁組織・JA とともに「野間馬保存会」を結成した。そして、事務局機能を JA に、実際の飼育・繁殖を乃万地区内の畜産農家に委託し、委託先の畜産農家所有地 18a を「野間馬放牧場」として飼育・繁殖を開始した。

順調な増殖を受け、昭和 60 年には日本馬事協会により野間馬は全国では 8 番目、四国では初の日本在来馬としての認定を受けた。そして、昭和 63 年には今治市指定文化財となるなど、その価値を認められている。

増殖による狭隘化、日本在来馬の認定、市の文化財指定、野間馬の活用の検討などを背景に、市は野間馬放牧場を整備拡張し、平成元年に 1.45ha の野間馬ハイランドを開園した。その後、平成 9 年に 5.63ha にてリニューアルオープンしている。

---

\*北里大学獣医学部 School of Veterinary Medicine, Kitasato University \*\*青森県 Aomori Prefecture

現在、野間馬ハイランドは野間馬保存会が指定管理者として管理利用を行っており、平成 19 年度の入場者数は 126,000 人である。年間経費は公園の一般管理経費（樹木の剪定等）を含め約 6000 万円であり、市が負担している。これで、12 名の職員の人件費や飼料代をまかなっている。一方、収入は乗馬料金 450 万円、施設利用料 500 万円などであり、市の歳入となっている。

## (2) とべ動物園

とべ動物園では現在、4 頭の野間馬を飼育している。野間馬の導入は基本的には動物園の判断で行われており、県レベルでの保存に関する上位計画は存在しない。そのうち 2 頭は野間馬ハイランド所有馬を借り受けているものである。感染症等より種を守るためには、異なる飼育場所による副次集団が必要となるが、現状ではとべ動物園が実質その役割を引き受けている。ただし、繁殖は野間馬ハイランドのみで実施するものとされている。

## 4. 野間馬の地域資源としての活用

野間馬ハイランドでは、日常的な活動として小学生を主対象とした引き馬乗馬・出張乗馬と、乗馬セラピーを実施している。また、年間を通じた活動として、地元小学校のクラブ活動（野間馬クラブ）と野間馬ハイランドのクラブ組織（騎馬隊キッズ）がある。引き馬乗馬と出張乗馬、乗馬セラピーをあわせると 19 年度には 26,400 人の利用があった。

引き馬乗馬は園内の乗馬広場で毎日午後（土日は午前も）実施している。GW などは 700 人/日、通常の土日で 400 人/日の利用者がある。出張乗馬は、市内小学校に野間馬を持ち込み、引き馬体験を実施するもので、これまでに 6 校で実施している。

乗馬セラピーは、市内の成人の心身障がい者施設や小学校の特別支援学級、小学生の障がい者サークルを対象に実施している。乗馬セラピーは当時の市長の発案で、市内の関係箇所に募集をかけて実施している。身体障がい者でも障がいの程度により馬に乗ることもできるが、利用の中心は自閉症・ダウン症などの方々である。

野間馬クラブは、4～6 年生を対象に 2 回/月、16 名の参加者で、騎馬隊キッズは 4～6 年生を対象に 2 回/月、10 名の参加者で、いずれも乗馬だけでなく、馬の世話なども体験している。

とべ動物園では、週 1 回土曜日に引き馬乗馬を実施している。25kg までの体重制限で 20 名まで受け付けている。

## 5. 考察

野間馬の保存と活用については、当初は絶滅の危機を回避するための保存に力点がおかれていたが、頭数の回復とともに教育や観光資源としての利用が始まり、現在に至っている。その効果は、教育・観光両面で、関係部署で高く評価されている。このことが、野間馬保存の機運をさらに高めるという効果をもたらしている。つまり、希少種の保全に際しては、地域資源としてそれを適切に活用することが、保全のための取り組みをさらに強める効果をもたらしている。

野間馬の保存・活用はこれまで行政主導で進んできた。野間馬ハイランドの収容力が限界に達し、市の財政事情も厳しい折、さらなる増殖を図るためには、野間馬保存会発足以前のように、行政以外の力を取り入れることが必要となるであろう。

最後に、本調査は青森県上北地域県民局の委託による。調査に際しては、とべ動物園、今治市、野間馬ハイランドの方々にご協力いただいた。記して謝意を表します。